

## 中学校におけるスクール・カウンセラーの活動（2）

### ～保護者に対する支援

#### The Practice of School Counseling in Junior High School (2)

#### ～ Support for Parents

相澤直子\*

Naoko AIZAWA

#### 【はじめに】

A県下のB中学校（以下B校と記載）には、H21年度から、筆者が初めてのスクールカウンセラー（以下、SC）として配置された。B校は首都圏のA県にある中学校で、生徒数は約500名（各学年4クラス）、教職員数約30名の中規模校である。半数強の生徒が附属の小学校から入学し、また各クラスに数名ずつの海外帰国子女がいる。家庭の教育水準および教育への関心はかなり高い。

教師陣は、県下の教科教育研究のリーダーとなるべく抜擢された、有能で熱意ある集団である。男女比は4：1であり、平均年齢が30代半ばという若さが特徴である。また、年間に多数の教育実習生を受け入れてその育成指導にあたることや、県内にとどまらず全国規模の教科研究会への参加等が、通常の教師としての業務に加えられていることも特筆すべきことである。

筆者は昨年度の拙稿（相澤2011）で、SC導入期における活動の留意点について、学校に対する支援という視点で考察した。そこでは、勤務時間の限られているSCが有効に活動するためには、「生徒や保護者にカウンセリングをする直接型支援よりも、教師が自身の対応に確かな意味を感じ自信が持てるように、“教師に対するコンサルテーション”に力を入れるのが望ましい。」また、「学校の特徴を知り、最もニーズのあるところへニーズに応える形の支援を柔軟に検討すべきであり、まずは“学校をアセスメントする”ことが重要である。」とまとめている。

しかし一方で、初年度には十分に取り組みなかった課題も浮かび上がってきた。その一つは、生徒や保護者からのSCの利用を促進し、生徒・保護者へのさまざまな支援を工夫することであった。

近年、「モンスターペアレント」という言葉が注目を集めているが、この問題は「とんでもない」一部の親の問題としてだけでなく、現代社会において多くの親がさらされている子育ての不安や、保護者と学校との関係の危うさを表すものであると、堀田（2010）は述べている。

中西・森ら（2002、2004）は、保護者を対象に質問紙調査を行い、SCの活動内容に対する保護者のニーズを明らかにし、「保護者が求める活動は個別相談に留まらず、多様な活動内容に対して必要性を認めている」、「SCに多くの活動内容を要望する保護者ほど、SCに対する関心が高い」と報告している。また市橋ら（2008）は、対応に苦慮する保護者との関係が好転した事例に着目し、SCを対象にした調査を行い、「SCとの連携」、「管理職が対応・関与する」、「SCが学校と保護者をつなぐ役割を果たす」ことが、事態の好転に寄与するとまとめている。

学校と保護者がよりよい信頼関係を構築していくためにも、SCは生徒・保護者・学校を円滑につなぐ役割を担うことが重要であると考えられる。だが、保護者への支援の観点から、SCの活動を論じたものは、まだ多くない。

そこで本稿では、保護者への支援に焦点を当て、基礎的なデータを基にして、SC導入期の活動の留意点について、あらためて考察したい。

#### 【方法】

##### （1）H22年度の活動

B校におけるH22年度（昨年度）のSCの活動を統計資料として提示する。さらにH21年度（初年度）のそれと比較して、活動状況の推移を概観する。

##### （2）保護者アンケート

SCに関する保護者のニーズを把握することを目的に、保護者を対象にアンケートを実施して、保護者支援について考察する。

#### 【結果】

##### （1）H22年度の活動報告

###### 1-1 相談受理件数、のべ相談回数

H21年度およびH22年度のSCが受けた相談受理件数を表1に示す。

\* 埼玉大学教育学部附属中学校スクールカウンセラー／埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

表 1 に見られるように、昨年度、ＳＣが受理した相談は全体で50件であり、前年度の41件を上回った。

表 1. 受理件数、のべ回数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
H21受理件数	3	0	12	4	0	3	5	0	4	3	6	1	41
H22受理件数	6	8	5	4	0	6	6	2	2	1	3	7	50
H21のべ回数	6	2	44	35	0	33	35	21	24	21	37	4	262
H22のべ回数	23	36	38	48	0	35	79	60	35	17	45	67	483

その内訳は、男27人女23人でほぼ同数、また学年別では、前年度と同様に2年生15人—3年生14人—1年生12人の順であったが、これもほとんど差がなかった。(表 2)

表 2. 男女別・学年別の受理件数

	1年	2年	3年	その他	計	
男		7	7	7	6	27
女		5	8	7	3	23
計		12	15	14	9	50

図 1 は、月別の受理件数の推移である。受理件数は前年度と同様に、年度の初め（H21年度の本格スタートは6月）が最も多く、2学期が始まると2回目のピークがある。H21年度は3月には受理件数が減ったが、H22年度は年度末まで新たな相談が入り続けた。

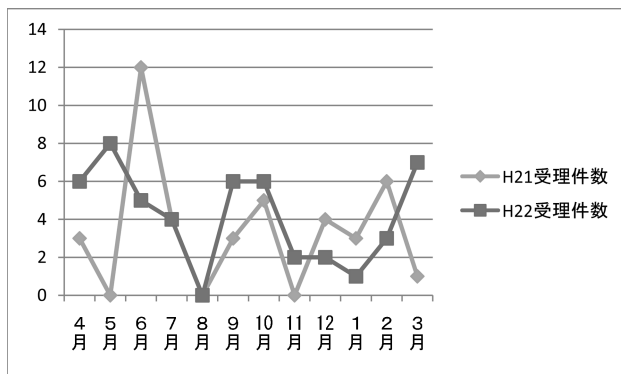


図 1. 月別受理件数

図 2 は、受理したケースを相談内容（主訴）別に分類したものである。H21年度は「学校に行きたがらない・行けない」等の不登校に関する相談が12件と最も多かったのに対して、H22年度はいじめや異性関係も含む友人関係に関する相談が15件で最も多かった。次いで、「意欲が出ない」「気分が落ち込む」「気性が激しい」「落ち着きがない」「だらしがない」「空気が読めない」等の心理や行動に関する相談が10件、不登校に関する相談が9件となり、前年度とは多少順位が入れ替わった。

なお、その他に分類される6件は、生徒間の問題ではなく、教師間や保護者間の問題や、年度初めに全生徒に実施しているストレスについてのアンケートへの記入を確認するために、ＳＣ側から呼び出したケース等である。

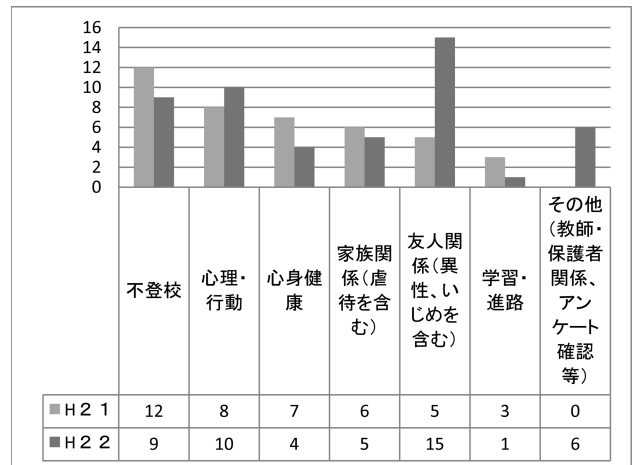


図 2. 相談内容

図 3 は、月別ののべ回数である。6月と1月以外は、どの月も前年度よりのべ回数が増え、表 1 にあるように、年間の総のべ回数は、H21年度は262回、H22年度は483回となって、前年度比約1.8倍と大幅に増加した。

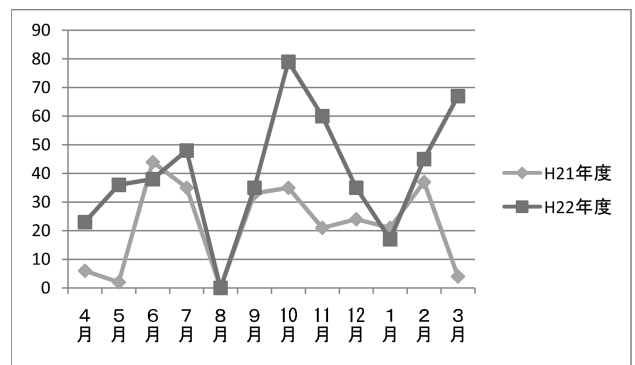


図 3. 月別のべ回数

### 1-2 相談対象

図 4 に相談対象別の相談のべ回数を示す。相談に訪れた生徒の実数は、H21年度7人からH22年度21人になり、図 4 に見られるように、生徒との相談のべ回数は29回から89回と、それぞれが約3倍になり、大幅な増加となった。また、相談に訪れた保護者の実数はH21年度14人、H22年度16人で、ほぼ横ばいであったが、相談のべ回数は57回から98回と約1.7倍になった。担任等の教職員とのコンサルテーションは91回から158回（約1.7倍）、さらに養護教諭との情報交換も78回から123回（約1.6倍）となった。

1回あたりの面接時間は、生徒との面接は、昼休みや放課後に15～30分程度である。教職員とのコンサルテーションや情報交換は、立ち話程度のものから小1時間におよぶものまで様々である。それに対して、保護者との面接は約1時間である。よって、のべ98時間程を保護者との面接に割いていたことになり、これはＳＣの業務時間全体の約1/3に相当する。

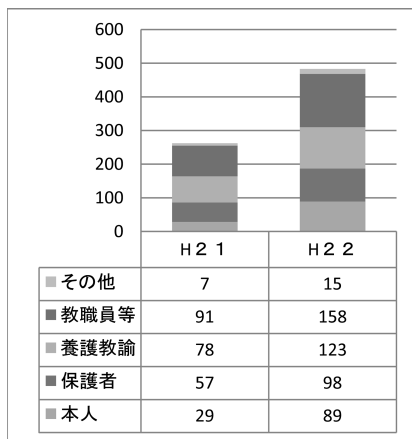


図4. 相談対象別のべ回数

### 1-3 その他の活動

表3に、相談以外の活動を示す。

毎週SCの勤務日に合わせ、授業時間の1コマを使って、生徒指導・教育相談連絡会が開催されている。学校行事等で時間が取れない場合を除いてほぼ毎週行われ、SCも面接が入らない限り参加（14回）して、生徒指導上または教育相談的視点から気になったり配慮が必要だったりする生徒について、教職員と一緒に生徒理解を深めるための協議を行った。また正規の連絡会以外にも、担任・学年主任・養護教諭・部活顧問等、生徒に関わる教職員が集まって生徒への対応の在り方を話し合ったり、校内体制や教職員間の問題についてのミーティングを行ったりした（10回）。

さらに、近隣校の学校保健委員会の講師として招かれて、教職員と保護者を対象に研修を実施した。

その他に、SC配置以前にスーパーバイザーとしてB校に関わってくださっていた大学教員と、SCの活動全般やケースの引き継ぎ・連携について協議する機会もあった。

一般の生徒・保護者に対しては、SCの活動を周知してもらえるように、可能な限り始業式等の教職員紹介の場で挨拶をしたり、行事や授業を参観したり、PTA広報紙にSCのコーナーをいただいて寄稿したり、学期末の保護者会でその時期の生徒の心理的状况について短い講話をしたりする活動を行った。しかし、業務における面接の時間が大幅に増加したため、広報用の文書を作成して配布する回数は減ってしまった（4回）。

表3. その他の活動

	H21年度	H22年度
《教職員との会議等》		
生徒指導・教育相談連絡会	18	14
その他のミーティング	14	10
教職員研修(近隣校の学校保健委員会講師)	1	1
実習生指導	1	3
《その他の活動》		
実践センターとのミーティング	3	2
広報活動(文書)	8	4
生徒対象教育活動(ストレスアンケート)	1	1
保護者対象心理教育活動(講話、文書)	3	2
その他(参観、行事参加等)	3	4

### (2) 保護者アンケート

SCに関する保護者のニーズを把握することを目的として、保護者を対象にアンケートを実施した。

H23年の1学期末に、全家庭を対象に、各クラス担任を通じて質問紙を配布した。回収にあたっては封入していただき、教員には中が見えないようにした。全校生徒512人中回収数275（回収率53.7%）、内267が有効であった。

なお、有効回答数267の内、父親による回答はわずかに6であった。また、子どもの学年・性別による回答内容の差もほとんどみられなかった。そこで本稿では父母および子どもの学年・性別による差異は論じず、保護者として一括して扱った。

### 2-1 SCの周知度

SCの周知度については、「知っていて、利用（相談）したことがある」8人（3.0%）、「知ってはいたが、利用（相談）したことはない」257人（96.3%）で、ほとんど全ての保護者にSCの存在は認知されており、「知らなかった」はわずかに2人（0.7%）であった。（図5）

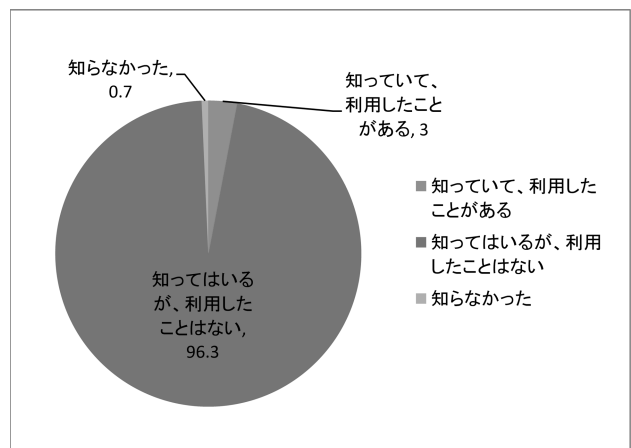


図5. SCの周知度（%）

### 2-2 SCを知ったきっかけ

SCの存在を知っていたと答えた保護者265人に、最初は何で知ったか？と尋ねたところ、「保護者会等で直接話

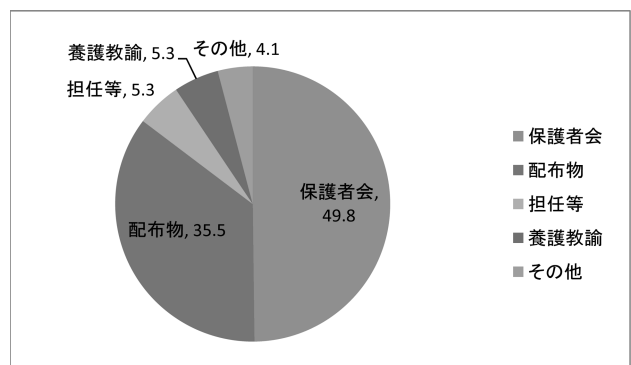


図6. SCを知ったきっかけ（%）

を聞いて」が132人（49.8%）で半数を占め、次いで「PTA広報誌や配布物から」が94人（35.5%）で約1/3、「担任や学年主任、顧問の先生から」は14人（5.3%）、同じく「養護教諭から」も14人（5.3%）、「その他」は11人（4.1%）であった。（図6）

その他の回答には、「きょうだいの学校や小学校にもいた」「入学前の説明会で聞いた」というものもあったが、「他の保護者から聞いた」（4人）が目立った。

### 2-3 利用しない理由

SCがいることを知ってはいたが、これまで利用（相談）したことがない人257人に、その理由を尋ねたところ、「特に相談したいことがない」が183人（71.2%）で大多数を占めた。（図7）以下、「こんなことを相談していいものか、人目につかないか、プライバシーが守られるかが気になってアクセスしにくい」24人（9.3%）、「個別の相談ではなく、講話や座談会なら参加してみたい」17人（6.6%）、「申し込みの仕方がわからない」8人（3.1%）、「時間が合わない」4人（1.6%）と続き、「その他」も21人（8.2%）であった。

「その他」と回答した人では、「今のところは相談に行くほどではない」「教員が適切に対応してくださるので、今のところは必要性を感じない」等が3人、「相談すべきことなのか家庭で解決すべきことか、よくわからない」「保護者会のついでにちょっと聞きたいとは思いますが、あらたまって相談となると気が引ける」等が3人、「自分は利用したことがないが、子どもは相談に行ったようだ」「親よりも先に子どもが相談するべき」が2人の他、「大丈夫だと言ってほしいだけのような気がしてしまう」「忙しくて余裕がない」という記述もあった。

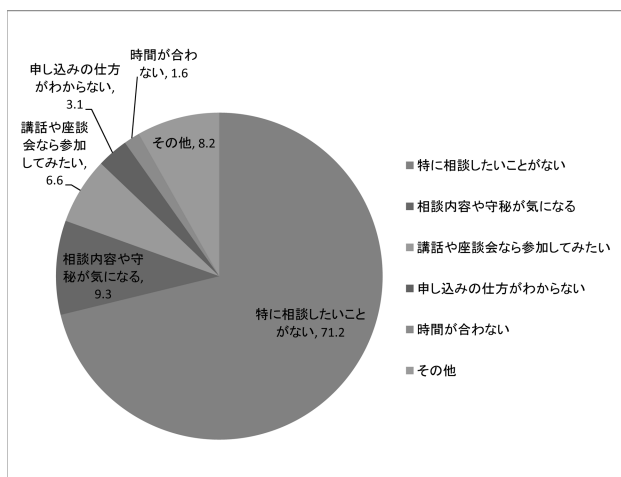


図7. 相談しない理由 (%)

### 2-4 SCに期待する活動

SCを知っていた人も知らなかった人も合わせて全員に、SCにどんな活動を期待するかを、2つまでの選択回答で尋ねた。（図8）

「子どもに対するカウンセリング」が199（選択された実数）で最も多く、「保護者に対するカウンセリング」が101で次いだ。さらに「子ども・保護者と学校との仲介・連絡」も73と続き、「授業やお便りの発行等による、子どもに対する心理教育的活動」52、「講話やお便りの発行等による、保護者に対する心理教育的活動」45であった。「外部専門機関との仲介・紹介」は12で、あまり多くなかった。

「その他」には、「特にない」「事例や対処などのまとめや統計等の配布」等の記述があった。

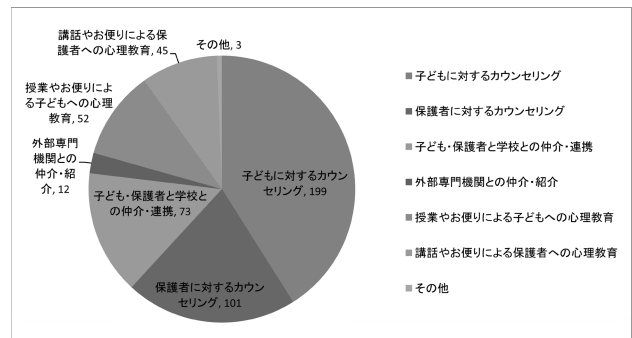


図8. SCに期待する活動（2つまでの複数回答、実数）

### 2-5 SCに対する意見や要望（自由記述）

SCに対する意見や要望を、自由に記入していただいたところ、多様な回答が得られた。以下に回答を列記するが、『 』は類似の内容に、筆者が見出しをつけたものである。（ ）内は、子どもの学年と性別。）

#### A群『SCに関心はあるが、もっと利用しやすくしてほしい』

- ・（1男、3女）子どもはもちろんだが、保護者に対しても、カウンセリングを受けやすくしてほしい。些細なことでも気楽に相談できるとよい。
- ・（1男、3女）日常の些細な悩み事を持ち込むのは大袈裟なのではと考えてしまう。差支えない範囲で、過去の相談事例等を紹介してもらえると利用しやすくなる。
- ・（1女、3男、3女）子育てに関する悩みは尽きないが、どの段階で相談したらいいのかわからない。在籍していないきょうだいのことも相談してよいものかわからない。
- ・（1女、3男）個人面談のように、いろいろ気軽に話していいものかわからず、「カウンセリング」のイメージは相談しにくい。どれくらいの内容や出来事を相談していいものかわからない。
- ・（2男、3女）ぜひ相談したいとは思いますが、なかなか聞きづらくて、利用をためらってしまう。
- ・（1女、2男）カウンセリングを受けるのは敷居が高い。気軽に悩みや不安を相談できる身近な存在になってほしい。
- ・（1男）メールや電話で相談できるとよい。

- ・（１男）カウンセリングの場所や日時の決め方等、プライバシー保護の仕方を具体的に教えてほしい。
- ・（２女）利用の仕方を周知しておくことは大切。
- ・（２男）直接カウンセラーと予約を取れるようにしてほしい。
- ・（２女）利用したいと思ったが、担任や養護教諭を通して申し込むことに抵抗がありやめた。
- ・（１女、３女）カウンセリングの日程をもう少し多くしてほしい。
- ・（３男）卒業後も相談を受けたい。
- ・（１男）子どもと口論して、親の私が不安になることがあり反省している。子どもの将来や何もかもが不安になり、ときどきＳＣを利用しようかと思う。
- ・（２男、２女、３女）難しい問題が発生してしまったときは相談したい。
- ・（２男）近々カウンセリングを受けたい。

#### B群『個別相談ではない形で話を聞きたい』

- ・（１男）本当に困ったとしても、プライバシーが守られるか心配で相談はしないと思う。全体会で講話を聞く機会があればうれしい。
- ・（１男）親子で会話する時間がだんだん少なくなり、たまに話してもぶつかることが多くなってきた。親として、これからの反抗期の子どもとどう向き合っていけばいいのか、高校入試に向けてどうやる気を上げさせていくのか、どう自信を持たせればいいのか等不安だらけ。是非とも時々講話を企画してほしい。
- ・（１男、３男、３男）思春期の子どもとの関わりで、心配や不安を感じることもある。ＰＴＡの時等に、短い時間でも講話等をしてほしい。
- ・（３男、３女、３女）ＰＴＡ等での話がとてもありがたかった。タイムリーな内容に安心した。保護者会での話を聞いて、身近に感じられて良かった。
- ・（１女）個人的な相談には抵抗がある。講話等による保護者への教育的な活動があれば参加したい。
- ・（３男）座談会のような雑談の中で、日ごろの思いを語り合えるような場があると参加しやすいし、気軽に相談できる。
- ・（３男）子どもについての悩みはどこの親でも大体共通すると思うので、集団向けのカウンセリングもしてほしい。

#### C群『子どもが相談しやすい工夫をしてほしい』

- ・（１男、３女、３女）多感な時期なので、冷静な第三者の言葉の方が響くことが多いと思う。子どもと関わる時間をもってほしい。親には悩みがあったとしても言っていない年頃なので、子どもが相談に行きやすい相談室であってほしい。
- ・（１男）子どもに対してあらたまった形ではなく、数人集めてちょっと話を聴いてみるとか、常に相談をしや

すいようにしてほしい。

- ・（１男）先生や他の子どもと関わらない立場で、保健室の先生のような存在で、時々一人一人の子どもと面談する日時を決めて、ざっくばらんに悩みを聞き出してはどうか。
- ・（１男）子どもたちはＳＣをどのくらい頼りにしているのか。親にも先生にも相談できないけれど大人のアドバイスがほしいときに、自ら訪れることができればと願う。
- ・（１女）ストレスの多い時代なので、アプローチしなくても、普段から生徒に声をかけたり、相談しやすい雰囲気作ったりしてほしい。
- ・（２男）子どももなかなか相談に行きにくいと思うので、日ごろから子どもたちと接する機会があればよいと思う。
- ・（３男）子どもが自ら相談に向ける時間と機会を作してほしい。
- ・（１男）子どもの友人が心身のコンディションを崩して保健室で寝ていた際に、ＳＣから声をかけられて、とても明るい光に感じたとのこと。いつも光のような存在で、難しくなってしまった心を温めてほしい。
- ・（１女）子ども自身には、自分にカウンセリングが必要かどうかわかりにくいので、心理テスト等をして、カウンセリングが必要な生徒にカウンセラーから声掛けをしてもらえるとありがたい。また、カウンセリングとは何かを、子どもにもわかるようにしてほしい。
- ・（２男）特別にしたい人だけでなく、全員に一度カウンセリングしてもらいたい。

#### D群『子どもの心を育ててほしい』

- ・（１男）子どもが親に対して本当の素顔・心を出していないところがあり、またその小さな芽が大きくなってからでは遅いので、定期的に子どもを癒し勇気づけるような講話や声掛けをしてもらえると、思春期の悩める子どもたちの大きな自信になると思う。
- ・（１男）人間関係や思春期の性に関する悩みなどに対し、正確な知識や情報をオープンな雰囲気です話し合えるような授業を（先生方と一緒に）企画してほしい。
- ・（２男、３女）子ども向けに、何か講話をしてほしい。

#### E群『ＳＣからのお便りがほしい』

- ・（１女、２女）保護者向けでも子ども向けでもよいので、活動内容がわかり親しみがわくようなお便り等を配布してもらえると利用しやすい。
- ・（１女、３女）思春期特有の悩みは誰もが持つことだと思うので、講話やお便り等の活動は、子どもにも親にも大変参考になると思う。解決するのに思い悩んだときは、個別に相談したい。
- ・（２男、３女）もう少し気軽に相談しやすいように、案内を増やしてほしい。

- ・（2女）何か問題が起こってから対応するよりも、未然に防ぐ親子関係の築き方を、機会あるごとに発信してほしい。

#### F群『相談してよかった！』

- ・（1女）子どもが利用して、良かったようだ。専門家と話ができると心強い。子どもが相談した時の様子や内容について連絡が取れたらいいと思った。
- ・（2男、2女）お世話になり助かった。とてもよく対処してくれて、感謝している。

#### G群『いることで安心できる』

- ・（1男）親も子も病んでいる時代。悩んでいる親子にとって、SCは大切。
- ・（2男、2女）思春期の子どもたちにとっては必要なことだと思う。よりどころでいてくれることを期待する。
- ・（2男）日本はまだまだカウンセラーに対して抵抗があるが、子ども社会もどんどん複雑になってきているので、必要なことだと思う。でも気持ちとしては利用せずに3年間過ごしたい。
- ・（1男）子どもがいじめにあったときに、力になってもらいたい存在だと思った。いるだけで心強い。
- ・（1男、1女、1女、1女、2男、2男、2男、2男、2女、2女、2女、3男、3男、3男、3男、3女）いることで安心できる。心強くてありがたい。
- ・（1女）いることがすごく安心。いろいろな講話を聞けるチャンスが増えるともっと嬉しい。
- ・（1女、1女）学校にSCがいると、子どもが人間関係に悩んだときに、身近に相談できる場所があると知っているだけで、安心して普段の生活が送れると思う。
- ・（3男）親には見えにくい子どもの心を、別の角度から見と一緒に向き合ってもらえると、親として心強い。
- ・（1女）プライバシーが守られることはもちろん大切だが、子どもが垣根を感じることなく、気軽に話せる大人が学校にいてくれると安心。

#### H群『こんな対応をしてほしい』

- ・（1男）親子で壁にぶつかることがあれば利用したい。そのようなときは、こちらの判断力が低下しているので、優しく受け止めてから、積極的に力強い指導をしてほしい。
- ・（1男）以前、市のカウンセラーに電話相談したところ、子どものことをステレオタイプに決めつけられて、それ以来相談しにくくなった。子どもは一人ひとり違うのだから、まずは話を聴いてもらいたい。
- ・（1男）トラブルの際、冷静・客観的に物事を判断できず、自分の感情をコントロールできない親がいてストーカーのようにしつこくされたことがある。そういう人に気付きのアドバイスをしてほしい。

#### I群『SCと教師の関係性』

- ・（1男）まずは担任へと考えるので、カウンセラーに相談すべきことがピンとこない。担任からSCへの相談を勧められることがあるのか？
- ・（1女）先に担任の先生に相談するべきではない、SCには相談しにくい。
- ・（3男）生徒・親・先生・カウンセラーの相互関係はどうか？
- ・（3女）学校が、SCへの面談を積極的に勧めていることに好感が持てる。希望すれば、子どもや保護者の考えを学校側に適切に伝えてくれるので、この仕組みのありがたさを感じる。
- ・（3女）B校は女性教員が少なく、細かな点で女生徒は不便だし、健康上もつらいことがある。環境も昔とは違うので、もう少し今の時代に合った融通をきかせた対応が必要だと思う。子どもが安全で健康な学校生活を送れるよう、学校に対するアドバイスや、生徒・保護者と学校との仲介を期待する。

#### J群『SCは不要?!』

- ・（1男）相談したい保護者や生徒は待てないのだから、毎日9:00～15:00くらいに勤務していないと全く意味がない。
- ・（1男）何ができるのか、何をしたいのかわからない。教員を増やした方がいいと思う。
- ・（2女）仕事をしているため時間が合わず、相談したくても難しい。

#### 【考察】

##### （1）統計から見た特徴

SCは全国の中学校を中心に定着し、様々な活動が展開されるようになってきている。遅ればせながらH21年度に初めてSCが配置されたB校においても、今回の統計に見られるように、受理件数・のべ相談回数ともに初年度に比べて増加しており、SCの活用が非常に増えてきていると言える。相談内容については、初年度は「不登校に関する相談」が最も多かったのに対して、昨年度は「友人関係に関する相談」が首位で、次いで「心理や行動についての相談」と「不登校に関する相談」がほぼ同数で並んだ。これは生徒本人からの相談が大幅に増えたことに関係しているものと考えられる。

なにより、B校で活動していて特徴的だと感じられるのは、保護者からの相談が多いことである。相談に訪れた実数としては、初年度14人、昨年度16人で、いずれも全体の2%程度に過ぎない。しかし、のべ相談回数は、初年度の57回から昨年度は98回と、約1.7倍となった。つまりは一人あたりの相談回数が、4.1回から6.1回に増えたことになり、保護者との相談が継続的にじっくりと行われるようになったと言えるであろう。

このことは相談回数に反映されているのみならず、先

にも述べたように、勤務時間に占める割合からしても、約1/3の時間を保護者との面接に割いていることとなる。B校においては、保護者への支援が重要な課題となっていることが、統計上からも示されている。

## （2）保護者アンケートから見た保護者のニーズ

協力的に回答してくれた保護者の声を中心ではあるが、SCの周知度は既に十分高いと言って過言でないであろう。

SCを知ったきっかけは、「広報誌や配布物から」というものが1/3であるが、それ以上に「保護者会等で直接話を聞いて」というものが半数を占めて最も多い。「教員から」の紹介は、担任らからと養護教諭からとを合わせても1割程度に過ぎない。筆者はできる限り、年度の初めに行われる入学式およびPTA総会の教職員紹介の場に出席すること、また日時が合えば学年保護者会で、挨拶を兼ねてそのときどきの生徒の心理的状态についての短い講話をすることをこころがけていたが、今回のアンケートには、そのようにSCから直接話を聞いていただき、人となりを見てもらうことが、なによりの広報活動となっていることが証明されたと言えよう。

統計からもアンケートからも、SCの利用率はこれまでのところ保護者全体の2～3%程度である。利用したことがない理由については、7割強が、「今のところ特に相談したいことがない」ではあったが、それでも、いざ相談となると敷居が高いと感じている保護者が約1割、また相談の申し込み方がわからない人も3%いた。SCと面接した保護者に安心感・満足感・落ち着きを得ただけのようなインテンシブな対応をするためには、出会える保護者数には時間的な限界があるのは仕方ないことであろう。しかし、もっと気軽な利用を呼び掛けたり、できるだけ多くの保護者と接する機会を設けたりする工夫は、今後必要である。

SCに期待する活動としては、「子どもに対するカウンセリング」が最も多く、「保護者に対するカウンセリング」、「子ども・保護者と学校との仲介・連絡」、「授業やお便りの発行等による、子どもに対する心理教育的活動」、「講話やお便りの発行等による、保護者に対する心理教育的活動」と続いた。「外部専門機関との仲介・紹介」はあまり多くなかったが、アンケートの回答者の多くは現在進行中の問題を抱えている訳ではないので、個別的・専門的な対応についてはイメージされていないものと思われる。

しかし保護者は、単に直接的なカウンセリングを望んでいるだけでなく、SCに対して多様な活動を認識しており、殊に、“学校現場の中にいる”専門家としての役割を期待していることが示唆された。SCの限られた勤務時間を有効に使うためにも、またできるだけ多くの保護者からの利用を促進するためにも、予防教育型・間接的支援の更なる工夫や努力が重要であり、ひいてはそれが

SCの敷居を低くすることにつながっていくと考える。

さて、アンケートの数値結果と重なるところでもあるが、SCの活動に対する自由記述には、保護者の生の声が具体的に表されている。

A群は『SCに関心はあるが、もっと利用しやすくしてほしい』というような意見として集約できる。保護者としてSCに相談してみたいと思うことはあるが、どの程度の内容なら受け入れられるのか、わざわざ相談に行くようなことなのかと構えてしまう等、抵抗を感じてためらってしまう保護者からの声が多数あった。

B群は『個別相談ではない形で話を聞きたい』というような意見としてまとめられる。A群よりは今すぐのニーズではないが、思春期の子どもを理解するために、こころの問題の専門家としてのSCから、話を聞いてみたいが、個別相談は敷居が高く感じるので、講話会や座談会のような、気軽に受身的にでも参加できる機会を望むということであろう。

C群は『子どもが相談しやすい工夫をしてほしい』というような、子どもへの直接的・個別的な支援を充実させてほしいという意見である。思春期の子どもこのころは、親にも見えにくくなってくるので、親がうまくかわれない分も専門家としてのSCに期待したいという意味合いも含まれている。

D群は『子どもの心を育ててほしい』というような意見で、C群同様に子どもへの支援を望む声であるが、子ども全体を対象にした心理教育的な働きかけを求めるものである。

E群は『SCからのお便りがほしい』という声で、SCとのかかわりを対面する形ではなく、SCからの通信文書等によって知識的に得たいというものである。今現在は、緊急な個別の問題を抱えている訳ではないので、積極的に相談に出かけるほどのニーズはないが、子どものこころへの関心はあり、広く一般的な知識や情報をSCから得られれば、というものである。

F群は、少数ではあるが、既に子どもなり保護者なりがSCとの接点を持った方からの、『相談してよかった!』という感想である。もちろん、SCと接したうえでの否定的な意見は表現されにくいので、皆が皆満足したとは思っていないが、このような肯定的な声が返ってくることは嬉しい限りである。少なくとも、実際にSCを利用した人がいることを知るだけでも、A群のような潜在的なニーズはあるがアクセスを躊躇している保護者たちに、「私もちょっと相談してみようかな」という勇気を与えるであろう。

G群は『いることで安心できる』という、多数の保護者の気持ちと言えよう。具体的な形ではないが、こころの問題の専門家としてのSCに、何かの時には力になってくれるものという期待感は少なくないことがわかった。

それに対してH群は『こんな対応をしてほしい』という、より具体的なSCの対応についての要望である。必

ずしも期待やイメージどおりの対応となるとは限らないが、相談に訪れた人の抱えている不安や疑念にもセンシティブでありたいと思う。

さらにI群は『SCと教師の関係性』を問う意見である。まさに“学校現場の中にいる”専門家としてのSCに対する、つなぎ役としての期待の反映であると同時に、実際のところがどうなっているのが保護者には十分伝わっていないということを表しているものと考えられる。

最後にJ群は『SCは不要?!』ではないのかという、否定的なニュアンスの意見である。しかし、これらはSCの活動状況の実際が十分に認識されていないことからくる誤解や、勤務形態の限界によって如何ともしがたい問題も含まれているが、違った形のサポートが欲しいという要望の裏返しでもあろう。こういく声こそ真摯に受け止めて、学校側とも協議していくべきと考えられる。

前述のように、B校の教師集団と保護者層にはそれぞれ特徴がある。「学校が、SCへの面談を積極的に勧めていることに好感が持てる。希望すれば、子どもや保護者の考えを学校側に適切に伝えてくれるので、この仕組みのありがたさを感じる。」「B校は女性教員が少なく、細かな点で女生徒は不便だし、健康上もつらいことがある。環境も昔とは違うので、もう少し今の時代に合った融通をきかせた対応が必要だと思う。子どもが安全で健康な学校生活が送れるよう、学校に対するアドバイスや、生徒・保護者と学校との仲介を期待する。」というアンケートの記述のみならず、実際に保護者（特に母親）と面接をしていると、若い・男性の・忙しい教員には遠慮して、もしくは評価されることが気になって、なかなか語りにくいという言葉がしばしば聞かれる。SCに対してだけそっと語られる母親自身の心情や家庭の状況や子どもへの思い等を、ていねいに聴き取っていきたくて思っている。そのうえで、単にSCが対応して終わりなのではなく、SCは必要に応じて適切な形で、保護者と学校、もしくは親と子どもとを“つなぐ”役割を果たしていることを、より一層周知していただけるよう努めていくことが必要である。

### 【まとめ】

本稿では、SCが配置されて2年が経過したB校での活動実践を、統計資料と保護者を対象にした調査から振り返り、特に保護者への支援という観点からSCの活動を考察してきた。

筆者はこれまでも、勤務時間の限られているSCが有効に活動するためには、「学校の特徴を知り、最もニーズのあるところへニーズに応える形の支援を柔軟に検討すべきであり、まずは“学校をアセスメントする”ことが重要である。」と考えてきた。本稿では、SCの活動がこれらの意図のもとに実践され、概ね保護者のニーズに合致した活動をしていること、またSCの多様な活動内容について保護者が認識していること、そしてその認識を

広めることこそが利用促進につながることを示されたと言えよう。

今後はより一層、生徒や保護者からのSCの利用を促進し、生徒・保護者へのさまざまな支援を工夫することが課題として提示された。特に、生徒・保護者への予防教育・心理啓発的な活動の試みを工夫していきたいと考えている。

### 【参考文献】

1. 相澤直子, 中学校におけるスクール・カウンセラーの活動～導入期の留意点について, 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 第10号, 37-44, 2011
2. 堀田香織, 学校と保護者の信頼関係構築, 学校と子ども理解の心理学 第10章, 金子書房, 2010
3. 中西三春, 森俊夫, スクールカウンセラーの活動内容に対する保護者のニーズ, こころの健康, Vol. 17, No. 2, 66-74, 2002
4. 中西三春, 黒沢幸子, 森俊夫, 私立女子中高等学校における保護者のスクールカウンセリング活動に対する要望の変化, こころの健康, Vol. 19, No. 1, 61-72, 2004
5. 市橋真奈美, 黒河内雅典, 富永良喜, 古川雅文, 教員の「保護者対応」に関する研究 I—スクールカウンセラーを対象にした調査結果をもとに, 発達心理臨床研究, 14巻, 1-8, 2008